

洪吟

(二)

日本語版

李洪志

目 次

堅定	1
無題	2
真性が現れる	3
心自ずから明らか	4
応報	6
法の網	7
大穹を正す	8
普く照らす	9
悪を除く	10
無	11
心に留めよ	12
行中	13
大劫を解く	14
道を得て明らか	15
迷うなかれ	16
道の中を行く	17
執着を去る	18
阻むもの無し	19
縁結ばれて蓮咲く	20
次第に揃う	21

真言	22
秋風涼し	23
預言	24
大道を行く	26
劫	27
掃除	28
必然	30
淘	31
大舞台	32
一幕の芝居	33
精進し正しく悟る	34
法は乾坤を正す	35
大法は素晴らしい	36
鐘楼	38
鼓楼	39
佛法無辺	40
無生の門に入る	41
如来	42
正念正行	44
神の路難し	45
正神	46
天また清らか	47
震懾	48

速やかに伝えよ	49
目覚めよ	50
誰か迷える	51
網収まりつつある	52
還れよ	53
神威	54
包圍殲滅	55
梅	56
塵に下る	58
大法を行く	60
一念の中	62
唐風	63
よく見よ	64
学員の文章を読む	65
乱世	66
正法より見る	68
征く	69
理智醒覚	70
金剛の志	71
法は一切を正す	72
龍泉寺	74
大法の徒	76
法輪は常に轉じる	78

洪誓大願	79
大穹を救う	80
劫数	81
危	82
蓮	83
断	84
香蓮	85
法が人間界を正す時	86
蠢か	87
哀しむなかれ	88
腰鼓隊	89
難	90
師徒の恩	91
神醒める	92
天門已に開く	93
何を恐れんや	94
轉輪	95
洪劫	96

けん てい 堅 定

覚め悟りし者 世に出でて尊しと為す

せいしゅう 精修する者 心篤くして圓滿す

巨難の中 堅く定まるべし

精進の意 転ずべからず

一九九九年五月三日

二〇〇四年二月修正

堅 定

覺悟者出世為尊

精修者心篤圓滿

巨難之中要堅定

精進之意不可轉

一九九九年五月三日

二零零四年二月修改



無 題

ダーファー
大法は人心を見る

世人は目覚めよ

神 人 鬼 畜 滅ぶるも

位置は自ら定む

一九九九年五月三日
二〇〇四年二月修正

無 題

大法看人心

世人要清醒

神人鬼畜滅

位置自己定

一九九九年五月三日
二〇〇四年二月修改



しんせい
真性が現れる

ダーファー
大法を堅く修めて 心動かず

次元を高めることこそ 是れ根本

試練を前にして 真性現る

功成り圓滿して 佛道神となる

一九九九年五月八日

見真性

堅修大法心不動

提高層次是根本

考驗面前見真性

功成圓滿佛道神

一九九九年五月八日



おの 心自ずから明らか

法は衆生を済度し 師は航路を導く
一つの帆昇れば 億の帆揚がる
執着^{ほうげ}を放下すれば 舟軽^{こころよ}く快し
人心^{ぼん}凡^{ぼん}にして重ければ 大海を渡り難^{がた}し
風雲突如として変わり 天は落ちんとす
山を排し海を搗^つき 悪浪^{あくろう}を翻^{ひるがえ}す
ダーファー
大法を堅く修めて ひしと師に随う

心自明

法度眾生師導航
一帆升起億帆揚
放下執著輕舟快
人心凡重難過洋
風雲突變天欲墜
排山搗海翻惡浪
堅修大法緊隨師



執着あまりに重ければ 方向に迷い
船翻り帆断たれ 命からがら逃げ去る
でいさ よな 泥沙を淘げ尽くせば こんこうあらわ 金光顯る
生死は たいげん 大言を説くに非ず
よく 能く行えるか否かに 真相見ゆ
他日 圓滿の時に至らば
真相大いに顯れて 天下^{ぼう}茫たり

一九九九年十月十二日
二〇〇〇年五月二十二日発表

執著太重迷方向
船翻帆斷逃命去
泥沙淘盡顯金光
生死非是說大話
能行不行見真相
待到它日圓滿時
真相大顯天下茫

一九九九年十月十二日
二〇〇〇年五月二十二日發表



応報

まつせ らんき
末世に爛鬼多く

人の皮を被^{かぶ}りて事をなす

間隔をひとたび除き尽くさば

世上に油鍋^{あぶらなべ}を据^すえん

二〇〇〇年九月一日

庚辰年八月四日

報應

末世爛鬼多

披著人皮作

間隔一除盡

世上擺油鍋

二〇〇〇年九月一日

庚辰年八月四日



法の網

ミンフイ
明慧 縁ある者を済度し

新生 脳中の悪を除き去る

とうひつ うれ しょう
人民刀筆 鬼に愁いを生ぜしむ

ファールンダーファー こ
法輪大法 是れ正見

二〇〇一年一月十七日
庚辰年十二月二十三日

法網

明慧救度有縁者

新生可去腦中惡

人民刀筆鬼生愁

法輪大法是正見

二〇〇一年一月十七日
庚辰年十二月二十三日



大穹を正す

邪惡 ^{いくとき} 幾時 ^{たくま} か遅しうせん

^{ことごと} 尽く衆生の志を ^{あらわ} 顕す

この劫 ^{ごう} 誰か外に在らん

笑いて見る ^{しゅうしん} 衆神の癡 ^{おろ} かなるを

二〇〇一年二月十日
辛巳年正月十八日

正大穹

邪惡 ^{いくとき} 幾時 ^{たくま} か遅しうせん

盡 ^{ことごと} 顯衆生の志を ^{あらわ} 顕す

此劫 ^{ごう} 誰か外に在らん

笑 ^{しゅうしん} 看衆神の癡 ^{おろ} かなるを

二〇〇一年二月十日
辛巳年正月十八日



あまね
普く照らす

神佛 世上^ゆを行き

邪悪 心に愁^{うれ}いを生ず

乱世に ^{ダーファー}大法解き

世の墮落を断ち塞^{ふさ}ぐ

二〇〇一年二月十七日

辛巳年正月二十五日

普照

神佛世上走

邪惡心生愁

亂世大法解

截室世下流

二零零一年二月十七日

辛巳年正月二十五日



悪を除く

車^ゆ行きて 十万里

剣^{ふる}を揮い 悪を消すこと急なり

天傾かば 掌^{しょう}を立てて撃^{ささ}ぐ

法を正して 陰^{いん}權^りを去る

二〇〇一年二月十九日

辛巳年正月二十七日

除惡

車行十萬里

揮劍消惡急

天傾立掌撃

法正去陰懼

二零零一年二月十九日

辛巳年正月二十七日



無

無 無 無 空にして 何も無し

善も無く 悪も無く 極みを出づ

進めば則ち万々の物と成るべし

退き去れば全く無にして 永く是れ迷いなり

二〇〇一年二月二十二日

無

無無無空無東西

無善無惡出了極

進則可成萬萬物

退去全無永是迷

二〇〇一年二月二十二日



心に^{とど}留めよ

^{いちろ} 一路の^{せいじん} 征塵 一路の風

万の悪を除き尽くして 万の衆生を生かす

心を勞し力を尽くして ^{えんえん} 淵怨の事を解く

風景を眺めて 心を喜ばず^{いとま} 暇も^{えがた} 得難し

二〇〇一年二月二十二日

留意

一路征塵一路風

萬惡除盡萬眾生

勞心力解淵怨事

難得歡心看風景

二〇〇一年二月二十二日



行 中

てんがい いすこ
天涯 何処か険しき

きょうちゅう
一望す 峽中の天

たず
神仙 何処にか尋ねん

し
対面すれども 仙を識らず

二〇〇一年二月二十二日
アメリカの大峽谷にて

行 中

天涯何處險

一覽峽中天

神仙何處尋

對面不識仙

二〇〇一年二月二十二日
於美國大峽谷



だいごう
大劫を解く

人の世のいかに多くの乱れし事

じゅう おんえん へ
重々の恩怨を経たり

あ
心悪しく 業大きく 望み無し

ダーファー ことごと えんげん
大法は尽く淵源を解く

二〇〇一年二月二十二日

解大劫

多少人間亂事

歷經重重恩怨

心惡業大無望

大法盡解淵源

二〇〇一年二月二十二日



道を得て明らか

いっちょう
一朝の天子 一朝の衆

朝々 縁を接つぎ 法を待つ

こんちょう
今朝の縁の中の事には構うなかれ

圓滿して家に帰らば ばんじ 万事に通ず

二〇〇一年二月二十四日

得道明

一朝天子一朝衆

朝朝接縁把法等

別管當朝縁中事

圓滿回家萬事通

二〇〇一年二月二十四日



迷うなかれ

誰か天の主^{しゅ}か

層々に法を離れし徒あり

自ら天穹^{てんきゅう}の主と称す

歸位^{きい}の時 已^{すで}に近し

見よ 誰かなお惑^{まど}う

二〇〇一年三月十四日

無迷

誰是天之主

層層離法徒

自命主天穹

歸位期已近

看誰還糊塗

二零零一年三月十四日



道の中を行く^ゆ

^{だいどう}
大道 世間を行く

迷いの中の衆生を救い済度す

名情利^{よな}を淘ぎ去らば

いかなる難か 聖^{はば}を阻^えみ得ん

二〇〇一年三月十九日

道中行

大道世間行

救度迷中生

淘去名情利

何難能阻聖

二〇〇一年三月十九日



執着を去る

修煉の事と言えども

心の中の執着を去るべし

自己に^{あら}非ざるものを切り捨つ

いずれも迷いの中の^ち癡なり

二〇〇一年四月十六日

辛巳年三月二十三日

去執

雖言修煉事

得去心中執

割捨非自己

都是迷中癡

二〇〇一年四月十六日

辛巳年三月二十三日



はば
阻むもの無し

修煉の路 ^{みち} 同じからず

すべて大法の中に在り ^{ダーファー}

万事執着無ければ ^{ばんじ}

脚下に路 ^{きやつか} 自ずから通ず ^{おの}

二〇〇一年四月十六日

辛巳年三月二十三日

無阻

修煉路不同

都在大法中

萬事無執著

腳下路自通

二零零一年四月十六日

辛巳年三月二十三日



縁結ばれて蓮咲く^{れん}

風流人物 今何処^{いずこ}にか在る

ダーファー^{ダーファー}かいだん
大法開壇して 相繼いで来たる

歲月悠々^{せんびやくど} 千百度

縁結び^{しょうか}正果なりて 衆蓮^{しゅうれん}咲く

二〇〇一年六月十九日

縁結蓮開

風流人物今何在

大法開壇相繼来

歲月悠悠千百度

縁結正果衆蓮開

二〇〇一年六月十九日



次第に揃^{そろ}う

あくろうひるがえ しょう
悪浪翻る中 曙光の跡を見る

かくこう ごうすう すで
各項の劫数 已に次第に揃う

そうきゅう
蒼穹法を正して 乾坤定まり

世間に立ち返りて しらみ
虱と卵をつまみ取る

二〇〇一年七月十七日

漸 齊

悪浪翻中見霞跡

各項劫数已漸齊

蒼穹法正乾坤定

返還世間掐蟲蟻

二〇〇一年七月十七日



しん げん
真言

神佛 世間に来たりて

句々 真言を吐く

天地 じんしん 人神の事

真機 法の為に伝わる

二〇〇一年八月十九日

真言

神佛來世間

句句吐真言

天地人神事

真機為法傳

二〇〇一年八月十九日



しゅうふう
秋風涼し

邪惡の徒よ せいぜい^{しょうきょう}猖狂するがよい

天地再び明らかとならば 沸き立つ湯に下らん

けんきやく^{がた}
拳脚は人心を動かし難し

狂風 秋を招きて 更に涼し

二〇〇一年十月二十五日

秋風涼

邪惡之徒慢猖狂

天地復明下沸湯

拳脚難使人心動

狂風引來秋更涼

二〇〇一年十月二十五日



預言

秋去らざるに 春すで已に到る
人信ぜざるも 全て到来す
天 口を開き 大地燃ゆ

預

秋不去 春已到
人不信 全來到
天開口 大地燒



邪悪は身を隠し 悪人は逃げ去る

功 湧きて進み 鬼は^な哭き^ほ吠ゆ

^{ダーファー}大法の徒 ^{きゅうしょう}九霄に上り^{のぼ}

天地を^{しゅしょう}主掌し 人の道を正す

二〇〇一年十二月三十日

邪悪躲 坏人逃

功湧進 鬼哭嚎

大法徒 上九霄

主掌天地正人道

二零零一年十二月三十日



だいどう ゆ
大道を行く

目を挙げて 青天を望めば

こうび こ まなこ
洪微 みな是れ眼

上下 焦点の聚る処

大道 世間を行く

二〇〇二年一月十五日

大道行

舉目望青天

洪微皆是眼

上下聚焦處

大道行世間

二零零二年一月十五日



ごう
劫

あん いんうん いくにち にご
黯々たる陰雲 幾日か渾る

げんかんことごと ゆ すで
嚴寒尽く逝きて 已に春を見る

衆生醒めて見る 心を驚かす事

中原の半ば さじん おお
沙塵に覆わる

二〇〇二年一月二十二日

劫

黯黯陰雲幾日渾

嚴寒盡逝已見春

衆生醒見驚心事

中原半壁覆沙塵

二〇〇二年一月二十二日



掃除

いんうん
陰雲過ぎ 風なお激し

せきりゆう
赤龍斬らるるも 人なお迷う

ところ いんばい
邪惡の処 陰霾あり

掃除

陰雲過 風還急

赤龍斬 人還迷

邪惡處 有陰霾



ダーファー
大法の徒 片手を立て

残った悪を除かんと 正念を起こす

真相を伝えて 衆生を救う

悪を滅し尽くし ^{かんう} 寰宇 ^{はら} を掃う

二〇〇二年一月二十三日

大法徒 單掌立

除餘惡 正念起

講真相 救眾生

滅惡盡 掃寰宇

二〇〇二年一月二十三日



必然

諸悪一齊に下りて 何等の狂ぞ

世を欺く大嘘 天を覆さんばかりに揚がる

戯れに道化を演じ 狂風を起こし尽くし

ダーファー 大法を際立たせし後 湯に下る

二〇〇二年一月三十日

必然

眾惡齊下何等狂

欺世大謊翻天揚

戲做人丑發盡颯

烘托大法後下湯

二〇〇二年一月三十日



淘

天傾き地覆りくつがえ 沙塵落つさじん

凡世ほんせの幾億人を毒害す

慈悲にて救い済度されし者は どれほどか

中原しよの処々に 新墳しんぶん加わる

二〇〇二年一月三十一日

淘

天傾地覆落沙塵

毒害凡世幾億人

慈悲救度知多少

中原處處添新墳

二〇〇二年一月三十一日



大舞台

人の世 五千年

中原は是れ舞台

心は劇中の事に夢中になり

陸離^{りくり}として 姿彩^{しさい}多し

醒めて あなたと私を見れば

舞台は法の為に設けられている

二〇〇二年二月一日

大舞台

人世五千載

中原是戲台

心癡戲中事

陸離多姿彩

醒來看你我

戲台為法擺

二零零二年二月一日



一幕の芝居

天は幕となり 地は是れ舞台

乾坤を運行し 天地開く

万古の事 法の為に來たれり

ファールン
法輪転じて 新たな三才

二〇〇二年二月五日

戲一台

天作幕 地是台

運乾坤 天地開

萬古事 為法來

法輪轉 新三才

二零零二年二月五日



精進し正しく悟る

法を学びて怠^{おこた}らざれば 変化はその中に在り
堅く信じて動かざれば 果^か正しく 蓮^{れん}成る

二〇〇二年四月六日

精進正悟

學法不怠變在其中
堅信不動果正蓮成

二零零二年四月六日



法は乾坤を正す

慈悲は天地を溶かし春となす

正念は世の中の人を救い得べし

二〇〇二年四月六日

法正乾坤

慈悲能溶天地春

正念可救世中人

二零零二年四月六日



ダーファー
大法は素晴らしい

ファールンダーファー
法輪大法は素晴らしい

大穹^{ほうこう} 法光照らす

法を正す洪勢^ゆ 過ぎ行きて

まさ^{みょう}方に知る 無限の妙

大法好

法輪大法好

大穹法光照

正法洪勢過

方知無限妙



ファールンダーファー
法輪大法は素晴らしい

次第に世人の道に入る

衆生よ 決して急ぐこと^{なか}莫れ

神佛 ^{すで}已に笑えり

二〇〇二年四月二十五日

法輪大法好

漸入世人道

衆生切莫急

神佛已在笑

二〇〇二年四月二十五日



しょうろう
鐘 樓

こうせい ほっかい
洪声 法界を震わし

法音 じっぼう
十方に伝わる

二〇〇二年五月五日

鐘 樓

洪聲震法界

法音傳十方

二零零二年五月五日



こ ろう 鼓 楼

じゅうすい もと
重錘の下 精進を知る

ほう こたた
法鼓敲いて 迷いの中の人を醒ます

二〇〇二年五月五日

鼓 楼

重錘之下知精進

法鼓敲醒迷中人

二零零二年五月五日



佛法無辺

こうろ
香炉は法を乱す鬼を収め尽くし

ほうてい
宝鼎は不法の神を熔かす

二〇〇二年五月五日

佛法無邊

香爐盡收亂法鬼

寶鼎熔化不法神

二零零二年五月五日



むしろう
無生の門に入る

虎に^{またが}騎りて 虎を^お下り^{がた}難し

人 神と賭けをせんとす

悪しき者 悪事を働き尽くし

自ら^{せいろ}生路を^{ふさ}塞ぎ切る

二〇〇二年五月十三日

入無生之門

騎虎難下虎

人要與神賭

惡者事幹絕

堵死自生路

二零零二年五月十三日



如 来

によい
如意の真理を帯びて来たり

しゃ だつ しかい ゆ
洒々脱々として 四海を行く

如 來

帶著如意真理來

灑灑脫脫走四海



法理を世間の道に遍く撒き

衆生を満載して 法船は出帆す

二〇〇二年五月十三日

法理撒遍世間道

満載衆生法船開

二零零二年五月十三日



正念正行

大覺は苦を畏れず^{おそ}

意志は金剛にて鑄らる^い

生死に執着無く

正法^{しょうぼう}の路 広く平らかなり

二〇〇二年五月二十九日

正念正行

大覺不畏苦

意志金剛鑄

生死無執著

坦蕩正法路

二〇〇二年五月二十九日



神の路難し^{かた}

悠々たる万世の縁^{ばんせい}

ダーファー 大法の一線牽く^ひ

難中に金体を煉り^{こんたい}

何故^{なにゆえ} 歩みは遅々たるや^ち

二〇〇二年五月三十日

神路難

悠悠萬世縁

大法一線牽

難中煉金體

何故步姍姍

二〇〇二年五月三十日



しょうしん
正神

正念正行

精進して止まず

法を乱す鬼を除き

衆生に善く接す

二〇〇二年五月三十日

正神

正念正行

精進不停

除亂法鬼

善待衆生

二〇〇二年五月三十日



天また清らか

天^{こん}昏昏として 地^{あん}暗暗たり

神雷^{しんらい}炸裂して 陰霾^{いんばい}散ず

法を乱す^{らんき}爛鬼を横ざまに掃えばとて

慈悲の心 ^{あわ}淡しと言うなかれ

二〇〇二年六月十六日
米国中部法会に寄せて

天又清

天昏昏地暗暗

神雷炸陰霾散

横掃亂法爛鬼

別說慈悲心淡

二〇〇二年六月十六日

寫給美國中部法會



しんしょう
震 懾

しんびつ じんよう ふる
神筆 人妖を震わし

かいとう らんき
快刀 爛鬼を消す

旧勢 法を敬わず

きごう きょうとう
揮毫して 狂濤を滅す

二〇〇二年七月二十八日

震 懾

神筆震人妖

快刀爛鬼消

舊勢不敬法

揮毫滅狂濤

二〇〇二年七月二十八日



すみ
速やかに伝えよ

ダーファー
大法の徒 真相を伝う

こうちゅう りけん
口中の利剣 一斉に放つ

らんき
爛鬼の嘘を暴き出し

のが
時を逃さず救い済度し 速やかに伝えよ

二〇〇二年八月二十一日

快講

大法徒講真相

口中利剣齊放

揭穿爛鬼謊言

抓緊救度快講

二〇〇二年八月二十一日



目覚めよ

ダーファー
大法の徒 涙を拭い去る

サタンの魔 全て崩壊す

真相を伝え 正念を発し

嘘を暴き 爛鬼を一掃す

二〇〇二年九月一日

清醒

大法徒 抹去淚

撒旦魔 全崩潰

講真相 發正念

揭謊言 清爛鬼

二零零二年九月一日



誰か迷える

^{さい}細々^{じんあい}微々たる一塵埃

造り成されし衆生 ^{どちゆう}土中に埋もる

迷いの中 世人は法^うを得るも

^{ぐきよう}愚狂^{かえ}は反って ^{じんせい}塵世の外に在り

二〇〇二年九月五日

誰迷

細細微微一塵埃

造化眾生土中埋

迷中世人能得法

愚狂反在塵世外

二零零二年九月五日



網収まりつつある

暴悪 いくとき 幾時か狂わん

秋風 しゅうふう すで 已に涼し

爛鬼 らんき しんたん 心胆寒し

末日 まつじつ 絶望を見ん

二〇〇二年九月十四日

網在收

暴悪幾時狂

秋風已見涼

爛鬼心膽寒

末日看絶望

二零零二年九月十四日



かえ
還れよ

十年の伝法^{でんぽう} 大門開けども^{だいもん}

幾多の衆生^い 入り得ず^え

世間に迷いて^{もと} 本を忘れ

狂風起こる時^{したが} 随いて壊る^{こわ}

二〇〇二年十二月十二日

還吧

十年傳法大門開

多少眾生進不來

迷在世間忘了本

狂風起時隨著壞

二〇〇二年十二月十二日



神 威

じんしょうむさん
塵消霧散して 気次第に清し

世人迷いより醒めて 眼中に驚きあり

ダーファー
大法の洪勢 人の世に満ちわたり

再び神佛の 世上^ゆを行くを見る

二〇〇二年十二月二十八日

壬午年十一月二十五日

神 威

塵消霧散氣漸清

世人迷醒眼中驚

大法洪勢漫人世

再看神佛世上行

二零零二年十二月廿八日

壬午年十一月廿五日



包^{せんめつ}囲殲滅

天^{ひるがえ}翻^{くつがえ}り地覆^{ようじゃ}りて 人は妖邪となる

世^{あざむ}を欺^{おおそ}く大嘘^{いんふう} 陰風身を切る

大^{ダーファー}法^{しゅうと}の衆徒 真相を伝え

正^{ほうりき}念^{ようけつ}の法力 妖穴を打ち砕く

二〇〇三年一月二十三日

圍剿

天翻地覆人妖邪

欺世大謊陰風切

大法眾徒講真相

正念法力搗妖穴

二〇〇三年一月二十三日



梅 元曲

じよくせ せいれん
濁世の清蓮 億万の梅

寒風の中 姿は更にみどり翠なり

天に連なるうせつ雨雪 神佛の涙なり

梅の帰るを待ち望む

梅 元曲

濁世清蓮億萬梅

寒風姿更翠

連天雪雨神佛淚

盼梅歸



世の中の執着の事に迷うなかれ

正念を堅く定め

いにしえ
古より今まで

ただこの一回の為なり

二〇〇三年一月二十八日

勿迷世中執著事

堅定正念

從古到今

只為這一回

二零零三年一月二十八日



塵に下る

ファールン
法輪転ずる時 必ず狂あり

国力を傾け尽くして 吾^わがために奔走す

どうけ
道化の妖しき芝居の尽きるを静かに見れば

ただ^{さんど}残土のみ 風に舞い揚がる

下塵

法輪轉時必有狂

國力傾盡為吾忙

靜觀丑角妖戲盡

只剩殘土風中揚



輪廻五千 雲と雨

積もる塵を払い去りて 長短を見る

大いなる劇 誰か^こ是れ風流^{ぬし}の主

ただ衆生の為に この一幕^{ひとまく}を演じに来たれり

壬午年臘月二十九日
二〇〇三年一月三十一日

輪廻五千雲和雨

揮去封塵看短長

大戲誰是風流主

只為眾生來一場

壬午年臘月二十九日
二〇〇三年一月三十一日



ダーファー^ゆ
大法を行く 宋詞

ファールンダーファー
法輪大法

深きこと測り知れず

大いなる蒼穹^{そうきゆう}を成し

衆生を造る

三字の真言^{しんげん}

理は白く 言は明らかなり

常人その表^{おもて}を知れば 厚き福^えを得

官吏^{かんり}その浅きを知れば 鏡^{ごと}の如く明らかなり

王その理を知れば

邦^{くに}を安んじ国を治め

太平を得ん

大法行 宋詞

法輪大法

深未測

成大蒼穹

造衆生

三字真言

理白言明

常人知表得厚福

官吏知淺明如鏡

王知理

安邦治國

得太平



せいせい い
盛世出で

君臣正しく

いんぶく
陰福を延ばし

たみ
民は安定し

五穀年々豊かなり

しゅうしゃ
修者は更に明らかなり

いつちょう い
一朝法を得て 道の中に入る

精進実修して 功法成就す

迫害に反対し

衆生を救い済度し

神の道を行く

二〇〇三年三月二日

癸未年正月三十日

出盛世

君臣正

延陰福

民安定

五穀年年豊

修者更明

一朝得法入道中

精進實修功法成

反迫害

救度衆生

神道行

二零零三年三月二日

癸未年正月三十日



一念^{うち}の中

心広く平らかに 大穹を正す
巨難 我に^{ともな}伴いて 天地^ゆを行く
功德^{くどく}の成^{かい}就は 意に介せず
天を正し地を正し 衆生を正す
真念^{こうがん}洪願 金剛の志
大洪^{だいこう}を再び造るも 一念の中

癸未年五月十三日

一念中

坦坦蕩蕩正大穹
巨難伴我天地行
成就功德腦後事
正天正地正眾生
真念洪願金剛志
再造大洪一念中

癸未年五月十三日



唐 風

身はこの山中に在りて

神思^{しんし}は仙境に遊ぶ

誰か是れ古^この中原^{いにしえ}なる

大唐^{ふう}の風を知らず

癸未六月

唐 風

身在此山中

神思遊仙境

誰是古中原

不知大唐風

癸未六月



よく見よ

世間小なりと雖も^{いえど}

大穹を^{ことごと}尽く照らす

満天^{こ まなこ}是れ眼

衆神^{しゅうしん}の視線 一点^{あつ}に聚まる

穹蒼^{きゅうそう}を組み直し

乾坤を再び造る

爾^{なんじ}も欲しがり それも欲しがり

悲しむべく笑うべし

法主 穹を正す

何物か逃^えれ得ん

二〇〇三年六月十九日

看好

世間雖小 大穹盡照

満天是眼 衆神聚焦

穹蒼從組 乾坤再造

爾要它要 可悲可笑

法主正穹 何物可逃

二〇〇三年六月十九日



学員の文章を読む

鋭き筆鋒^{ひつぼう} 華章^{かしやう}を著^{あらわ}す

語^{つよ}は勁く 句は奥深し

科学は満身これ穴だらけ

悪党^{ころも}の衣^はを剥ぎ取る

二〇〇三年七月二十二日

讀學員文章

利筆著華章

詞勁句蘊強

科學滿身洞

惡黨衣扒光

二零零三年七月二十二日



乱世 宋詞

中原上下 五千年

朝々代々 めんもく 面目を改む

まっせ 末世 どう 天に道無く

悪を行い また妖を行う

亂世 宋詞

中原上下五千年

朝朝代代換新顔

末世天無道

行惡又行妖



さいろう 豺狼 世を横行し

乱党 妖^{かしら} 頭に立つ

悪に報い無きにあらず

洪勢 まさに到来せんとす

二〇〇三年八月一日

豺狼世上走

亂黨妖領頭

不是惡不報

洪勢就來到

二零零三年八月一日



しょうぼう
正法より見る 宋詞

漢室の天下 韓信これを打ち立て

たいそう きょういき
大唐太宗の朝 疆域広大なり

岳飛 六郎 中原を保つ

何の為か

衆生 ここに来たるは法を得んが為なり

二〇〇三年八月十五日

正法看 宋詞

漢室天下韓信打

大唐太宗朝疆大

岳飛六郎保中原

為了啥

衆生來此要得法

二零零三年八月十五日



征^ゆく

万里馳騁^{ちてい}して 妖陣を破る

黒手^{くろて}を斬り尽くして 悪神を除く

大霧^{たいむ}狂風 舞わば舞え

一路^{さんう}の山雨 征塵^{せいじん}を洗う

二〇〇三年九月二日

征

馳騁萬里破妖陣

斬盡黒手除惡神

管你大霧狂風舞

一路山雨洗征塵

二零零三年九月二日



理智^{せいかく}醒覺

少しく^{やす}息みて^{じせい}自省し 正念を加う
不足を明らかにして 再び精進す

二〇〇三年九月四日

理智醒覺

少息自省添正念
明析不足再精進

二零零三年九月四日



金剛の志

秋高く 気は次第に清し

^{あい}靄々たる^{いんばい}陰霾 ^す過ぐ

指折りて時日を^{じじつ}算^{かぞ}うれば

大穹の去るまで幾ばくもなし

迷える衆 各々乱を^{たくま}逞しくし

巨大なる危機 ^{せま}迫るを知らず

崩壊の前に力を尽くして挽回し

^{らんき}爛鬼の^{かがい}禍害 ^{ゆる}いかで容さん

^{しねん}志念は金剛を超え

洪微は^こ是れ^わ我が^な為すところ

二〇〇三年九月四日

金剛志

秋高氣漸清 靄靄陰霾過

時日掐指算 大穹去無多

迷眾各逞亂 巨危不知迫

力挽崩裂前 怎容爛鬼禍

志念超金剛 洪微是我做

二零零三年九月四日



法は一切を正す

三界の外へ 衝き出^いでて

空^{くうむ}無^に 大^{だい}宇^う顕^{あらわ}る

法 乾坤を正して久し

一旦鎮まるも 悪また起こる

四^し大^{だい} 已^{すで}に風化し

旧法 解体しつつあり

法正一切

衝出三界外

空無顯大宇

法正乾坤久

預歇惡又起

四大已風化

舊法在解體



天体 無限に大きく
かんたい 寰体 ひろ また極めて洪し
大穹 すで 已に去ること遠し
し ゆ い 主位 けんれい 更に絢麗なり
てんせい 天性の豪気 洪大なり
しょうま 消磨すとも 去らず
意は金剛の志の如し
ダーファー 大法の理 いっとう を一統す

二〇〇三年九月二十日

天體無限大
寰體又洪極
大穹已去遠
主位更絢麗
天性豪氣洪
消磨也不去
意如金剛志
一統大法理

二零零三年九月二十日



龍泉寺

壯麗たる古刹こさつ 密林かんの間

晨霧しんむりょう繚々として 湖面より起こる

龍泉寺

壯麗古刹密林間

晨霧繚々起湖面



ろうだいていかく はくうん もと
楼台亭閣 白雲の下

唐風の新しき寺に 真仙有り

二〇〇三年九月三十日

樓台亭閣白雲下
唐風新寺有真仙

二零零三年九月三十日



ダーファー
大法の徒 宋詞

ダーファー
大法の徒

中原にて難を蒙り

天地は無道 爛鬼狂う

正法の洪勢 眼前に在り

法はこの世を正す

大法徒 宋詞

大法徒

蒙難在中原

天地無道爛鬼狂

正法洪勢在眼前

法正人世間



ダーファー
大法の徒

重き任を肩に担^{にな}う

衆生を救い済度し 真相を伝え

毒害を一掃し 法は無辺なり

神の路^{みち}はさほど遠からず

二〇〇三年十月一日

大法徒

重任擔在肩

救度眾生講真相

清除毒害法無邊

神路不算遠

二零零三年十月一日



ファールン
法輪は常に轉じる

ダーファー
大法は圓容にして 乾坤を正し
法王は慈悲にして 大穹を造る

二〇〇三年十月三日

法輪常轉

大法圓容乾坤正
法王慈悲造大穹

二零零三年十月三日



こうせいたいがん
洪誓大願

そうかいそうでん へ こうがん
滄海桑田を歴尽くして 洪願を果たし
さ た うち
歲月蹉跎たるも ただ一念の中

二〇〇三年十月七日

洪誓大願

歴盡滄桑洪願了
歲月蹉跎一念中

二零零三年十月七日



大穹を救う

古今 かつて有らず

これより 天地久しからん

こうこ きゅうそう
恒古の大穹蒼を見れば

誰か敢えて再び下へ走らんや

二〇〇三年十月十二日

救大穹

古今不曾有

將來天地久

看恆古大穹蒼

誰還敢再下走

二〇〇三年十月十二日



ごう すう
劫 数 元曲

中原の大地

五千年の文明

ふうろう
風浪止まず

西より来たりし幽霊

衆生を害し

古風を破る

人よ早く醒めよ

ダーファー
神州に大法 行われ始む

二〇〇三年十一月十一日

劫 数 元曲

中原大地

五千文明

風浪不止

西來幽霊

害衆生

破古風

人快醒

神州大法開行

二〇〇三年十一月十一日



危

世の気風 日増しに下り^{くだ} 衆流れを助長す^{しゅう}
爛鬼^{らんき}先頭に立ち 人々後^{あと}に従う
我^{われ}は世人のために愁^{うれ}うるも
人は己^{おのれ}のために憂^{うれ}えず

二〇〇三年十一月二十日

危

世風日下衆助流
爛鬼帶頭人跟走
我為世人愁
人不為己憂

二〇〇三年十一月二十日



はす
蓮 元曲

ばんりん じょうれん わ う
万輪の浄蓮 我が栽えしもの

厳寒に雪を凌^{しの}ぎ 一斉に咲く

天晴れて 園^{その}に満ち 春來たる

せん し ひやくたい
仙枝百態

こうふう し
香風沁み 天外へと漂う

二〇〇三年十二月一日

蓮 元曲

萬朵淨蓮我栽

嚴寒傲雪齊開

天晴滿園春來

仙枝百態

香風沁飄天外

二〇〇三年十二月一日



断 元曲

修は難^{かた}からず

心は去り難^{がた}し

幾多の執着 いつ断^えち得ん

誰もが知る 苦海^{くかい}に岸無きことを

意堅^{かた}からざれば

関は山の如^{ごと}く

いかにして凡^{ぼん}を出^いでん

二〇〇四年一月一日

斷 元曲

修不難

心難去

幾多執著何時斷

都知苦海總無岸

意不堅

關似山

咋出凡

二零零四年一月一日



こう れん
香 蓮

じょうれん
浄蓮 法中に生じ

慈悲にて香風を散らし

世上に甘露かんろ そそを洒ぎ

蓮開きて 天庭てんてい みに満つ

二〇〇四年元旦

香 蓮

浄蓮法中生

慈悲散香風

世上洒甘露

蓮開満天庭

二〇〇四年元旦



法が人間界を正す時

らんき すで
爛鬼 已に滅び絶え

黒手 のうけつ
膿血と化す

世人の行いし事

必ずやあくえき
悪疫に苦しめられん

二〇〇四年一月一日

法正人間時

爛鬼已滅絶

黒手化膿血

世人幹的事

必遭惡疫虐

二〇〇四年一月一日



おろ
蠢か 元曲

狂 狂 狂

はり
梁の上に跳び上がり

からす さえぎ
烏鴉 太陽を遮る

蠢かさ 悪 嘘

大いに暴かれ

ねた
妬みの火 心を攻めて 本性を現す

ひきがえる
蟾蜍 油の湯へと跳ね落つ

二〇〇四年一月八日

蠢 元曲

狂 狂 狂

跳上櫓

烏鴉遮太陽

蠢悪謊

大曝光

忌火攻心現原象

蟾蜍躡下油湯

二〇〇四年一月八日



かな
哀しむなかれ

身は牢屋に臥すれども 傷み哀しむなかれ

正念正行なれば 法は在り

幾多の執着の事を静かに思い

人心を捨て去れば 悪は自ずから敗れん

二〇〇四年一月十三日

別哀

身臥牢籠別傷哀

正念正行有法在

靜思幾多執著事

了卻人心惡自敗

二〇〇四年一月十三日



ようこ
腰鼓隊 元曲

腰鼓の陣

法中の神

ほうこせい
法鼓声々 すべて真善忍

三界に悪を除き 世人を救い

雄姿と正念 天門を震わす

らんき いずこ のが
爛鬼 何処にか遁れん

二〇〇四年一月二十二日

腰鼓隊 元曲

腰鼓陣

法中神

法鼓聲聲都是真善忍

三界除惡救世人

雄姿正念震天門

爛鬼哪遁

二〇〇四年一月二十二日



難

せんしんばんく 十五秋
千辛万苦 十五秋

誰か知らん 法を正す苦と愁い

ただ衆生の救われ得んがために

洪微を出ださずんば 止むことなし

二〇〇四年一月二十二日

難

千辛萬苦十五秋

誰知正法苦與愁

只為眾生能得救

不出洪微不罷休

二〇〇四年一月二十二日



しと 師徒の恩

狂悪は四年の^{ひょうふう}颪風 ^{かじ}舵穩やかに航迷わず
法徒 魔難^へを経て 重圧にも志移らず
師徒は情を講ぜず 佛恩は天地を化す
弟子の正念足れば 師は回天の力有り

二〇〇四年二月一日

師徒恩

狂悪四年颪 穩舵航不迷
法徒經魔難 重壓志不移
師徒不講情 佛恩化天地
弟子正念足 師有回天力

二零零四年二月一日



神醒める

衆生よ 早く目覚めよ

中原に落とし穴が^{もう}設けられている

みな法の為に来たというのに

^{なぜ}何故 理がはっきり分からないのか

二〇〇四年二月十七日

神醒

眾生快快醒

中原設陷阱

都是為法來

何故理不清

二〇〇四年二月十七日



天門すで已に開く

佛恩こうとう浩蕩 衆生を済度す

乾坤を再び造らんと ダーファー 大法来たる

こうがん 洪願にて 穹体と天地固まり

微を正し 洪を正し 三才を正す

世人醒め 正念い出づれば

万古の天門 これより開かん

二〇〇四年二月二十八日

天門已開

佛恩浩蕩度衆生

再造乾坤大法來

洪願穹體天地固

正微正洪正三才

世人能醒正念出

萬古天門從此開

二〇〇四年二月二十八日



何を恐れんや

あなたに恐れ有れば
すなわち掴みかかる
念ひとたび正しければ
すなわち悪は崩る
修煉の人
法を身に帯び
正念を発すれば
らんき
爛鬼炸裂す
神 世に在りて
法を実証す

二〇〇四年二月二十九日

怕啥

你有怕	它就抓
念一正	惡就垮
修煉人	裝著法
發正念	爛鬼炸
神在世	證實法

二〇〇四年二月二十九日



轉輪

百年の紅朝 ひたすら殺し続け

乾坤倒に運びて 中華を弄ぶ

今この時 紅花の盛りをはっきり見て取るも

他日 蓮花の咲くを知り得るか

二〇〇四年三月五日

轉輪

百年紅朝一路殺

乾坤倒運戲中華

看明此時紅花盛

可曉它日開蓮花

二零零四年三月五日



こう ごう
洪 劫

法はこうきゆう洪穹を正し きゆうじん旧塵を除く

天地ぼう茫々として しよ処々に春

悠々たる万古の洪勢 過ぎ去れば

あらためて見る 新しき宇宙の佛道神

二〇〇四年三月八日

洪 劫

法正洪穹除舊塵

天地茫茫處處春

悠悠萬古洪勢過

再看新宇佛道神

二零零四年三月八日

